

自己評価	<p>教育目標 考える力・創り出す力を伸ばす</p>
	<p>年度末の最終評価</p>
自己評価	<p>教育目標の達成状況、次年度に向けた見直し</p> <p>1. 達成状況 本年度の保育を通して、子どもたちはのびのびと元気に遊び、教師との信頼関係も安定して形成されてきた。友だちとの関わりについても個人差はあるものの、年齢に応じた姿へと成長が見られ、相手を意識しながら活動を進める場面が増えている。 遊びの面では、当初、一つひとつの遊びが単発的で、広がりにくい姿も見られた。しかし、経験を重ねる中で、子ども自身が「こうしたい」という思いをもって関わるようになり、自分たちで遊びの楽しさを見つけ出そうとする姿が徐々に育ってきた。これは、自らの興味を起点に遊びを発展させる力が芽生えてきたと評価でき、教育目標である「考える力・創り出す力」の基礎が育ちつつあると捉えている。 一方で、次のような課題も明らかとなった。特性により困り感のある子どもへの配慮に難しさがあり、集団活動をどのように構成すれば、全員が安心して参加できるのかについて、さらなる検討が必要である。また、相手の気持ちや立場を理解し、譲る・許すといった社会的行動が十分に育っていない場面も多く、トラブルにつながるがあった。さらに、感情のコントロールや場面に応じた行動選択など、「自らを律する力（折り合い・自己調整力）」の育ちにも、まだ課題が見られる。 これらの課題については、子ども一人ひとりの育ちの違いや特性を踏まえながら、丁寧に対応していく必要があり、環境構成や支援の在り方をより一層工夫していくことが求められる。</p> <p>2. 次年度に向けた見直しの方向性</p> <p>【特性に応じた個別支援の強化】</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもが安心して活動に参加できるよう、個別の特性理解を深めるとともに、場面ごとの支援方法や声掛けを保育者間で共有する。 集団の中でも見通しを持ちやすい環境（写真や絵カード、役割の明確化など）を整え、安心して取り組める基盤づくりを行う。 <p>【社会性の育ちを促す関わり・環境づくり】</p> <ul style="list-style-type: none"> 相手の気持ちに気づけるような言葉掛けや、気持ちを表現できる場を意図的につくる。 “どうしたらうまくいくか”を子どもと共に考える対話を大切に、トラブルも学びに変えていく。 <p>【折り合いをつける力・自己調整力を育てる具体的な取組の導入】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生活や遊びの中で、選ぶ・振り返る・切り替えるといった経験の積み重ねを意識的に取り入れる。 落ち着いて過ごせるスペースの設置や、活動の切り替えに時間的余裕を持たせるなど、環境面からも支援する。 <p>【遊びの継続・発展を支えるかかわりの工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもの興味や思いを丁寧に受け止め、遊びが広がるような環境づくりと材料準備を行い、適切な言葉掛けを行う。 遊びの記録や写真を用いて、子ども自身が自分の活動を振り返り、次への意欲を持てるようにする。
	学校関係者評価

学校関係者評価の評価日・評価者

	評価日	評価者
中間評価	令和7年10月17日～27日	学校運営理事
最終評価	令和8年3月6日	学校運営理事

(1) 幼稚園教育（保育の改善・充実）について

<p>具体的な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちが主体的に遊んでいる様子や、友達と思いを伝え合っている姿について話し合う。研修などで具体的なエピソードを共有しながら、子どもの成長や発達、環境の整え方、教師のサポートについて意見交換を行う。 異なる年齢の子どもたちが交流する「幼稚園家族」の取り組みを通じて、様々な人と関わるための援助や環境について考える。子どもたちが人と関わる楽しさや、つながりの心地よさを感じられるようにする。
<p>(取組結果を検証する) 各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> 日々の活動から得られる具体的なエピソードから検証。(子どもたちが主体的に遊び、友達と気持ちを言葉で伝え合うための環境を整える方法、教師がどのように援助するかについて考察する研修を実施。) 公開保育の実施と事後研修で行われる協議と指導助言。(環境の整え方や教師の援助について学んだ内容を共有。) 保護者アンケートの関連項目についての回答を集計分析。(結果を今後に反映。)

中間評価

<p>各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> エピソード研修について 学校指導課の助言を受けながら研修を進め、一人の子どもの心の変化に寄り添う支援、友達との関わりの中で自分の思いを表現できるようにする支援、生き物とのふれあいを通して愛着を育む支援について考察を深めた。 研究保育について 小学校の教員と連携して研修を行い、子どもの姿の捉え方について、個々の様子や「10の姿」、環境、教師の支援の視点から意見交換をすることができた。 保護者アンケート結果について 「子どもが夢中になって遊ぶことを通して、主体的に学ぶ力（学びに向かう力）を身につけていると思うか」という項目に対し、「あてはまる」と回答した保護者は88%、「ややあてはまる」は12%であった。 	
自己評価	<p>分析（成果と課題）</p> <ul style="list-style-type: none"> エピソード研修について 子どものその瞬間の心の動きを捉え、寄り添い、受け止め、友達との関係づくりを支援する教師の関わりについて考える機会となった。エピソードを共有することで、他の教員の考え方や願い、援助の方法に触れ、学びを深めることができた。今後は、各学年の発達段階に応じた関わり方や環境づくりについて、さらに検討していきたい。 研究保育について 小学校教員との協働により、子どもを多面的に捉える視点を得るとともに、幼児期の遊びの重要性を再認識することができた。子どもの育ちの連続性や、幼児期の遊びの充実について積極的に発信していきたい。今後の課題としては、子どもの思いと教師の願いやイメージを共有しながら遊びを展開するための教師の関わり方や、学年を越えた連携の在り方をさらに深めていくことが挙げられる。 アンケート結果の考察 子どもが幼稚園に行くことを楽しみにしている様子から、園での生活を楽しんでいると保護者が感じていることがうかがえる。教職員が「夢中になって遊ぶ」ことを意識し、遊びの充実を願って関わっている姿勢が、アンケート結果に反映されたのではないかと考えられる。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究保育や日々の保育を通して

	<p>子どもの心の動きや人とのつながりに目を向けながら、それに応じた支援の在り方について継続的に考えていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園全体での環境づくりと援助の工夫 <p>幼稚園の職員や他学年との関わりを含め、子どもがさまざまな人と関われるような援助や環境について園全体で検討し、それぞれの学年の発達段階に応じた育ちが繋がっていくようにしていく。</p>
	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園内での行事や日常の活動を通して、異年齢の子ども同士が関わり合う「幼稚園家族」の取り組み内容。 ・アンケート「子どもは、夢中になって遊ぶことを通して、主体的に学ぶ力を(学びに向かう力)を身につけていること」の回答。
<p>学校関係者評価</p>	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>幼稚園では、子ども一人ひとりを大切にしたい教育を今後も継続してほしい。また、さまざまな人との関わりが子どもの成長にとって重要であることから、異年齢児との交流や「幼稚園家族」としての活動を通じて、豊かな人間関係を築く経験を十分に積んでほしい。</p>

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間を通した行事(パーティー3回・季節の集い・園外保育)と日常生活の両面から異年齢関係を育む取り組みを進めたことで、「幼稚園家族」としての一体感が高まった。子どもたちの思いやり・協力・主体性も育ってきた。 ・アンケート「子どもは、夢中になって遊ぶことを通して、主体的に学ぶ力を(学びに向かう力)を身につけていること」の保護者回答はあてはまる84%、ややあてはまる5%であった。
<p>自己評価</p>	<p>分析(成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「幼稚園家族」の取り組みについて <p>本年度は、幼稚園家族での活動や行事、日常の保育を通して、異年齢の関わりが広がり、子どもたちの成長が多方面で見られた。特に、移動場面では5歳児が自然に3歳児の手を取り、歩く速度を合わせたり安全に配慮したりするなど、思いやりのある行動が増えた。また、昼食の準備や活動場所での支度を年長児が進んで助ける姿も多く見られ、リーダーとして小さい子のサポートを積極的に行う姿が育ってきた。</p> <p>幼稚園族内では、子どもたち自身が役割分担を行いながら活動に取り組む場面が増え、「協力する楽しさ」を仲間と共有する姿が見られた。こうした異年齢交流で培われた自信や育った力は、通常の保育活動にも表れ、安心して人とつながり、のびのびと友だちと遊ぶ姿につながっている。</p> <p>一方で、課題として、行事では交流が深まるものの、日常の保育場面では関わりが固定されやすい傾向が見られた。また、3歳児・4歳児からの主体的な関わりが弱く、年長児のサポートに頼りがちな構造になる場面もあった。異年齢のよさが毎日の遊びや生活の中でも発揮されるよう、環境の工夫や関わり方の見直しが引き続き求められる。</p>
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>行事を通して異年齢で自然に触れ合い、互いの存在を認め合う姿が見られた。今後も行事と日常を連動させながら、異年齢交流の機会を継続し、以下の点に留意していきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常活動にもっと異年齢のよさを生かすこと ・環境、役割、支援の適切な調整 ・子ども理解にもとづく職員連携の強化
<p>学校関係者評価</p>	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動会などの参観で成長を見守る喜びや懐かしさがよみがえった。幼稚園が、子育てをしている保護者と共に子どもの成長を喜び合える場所であり続けてほしいと願っている。 ・日々の小さな成長や子どもたちの姿を共有してもらえることで、家庭と園が同じ方向を向いて子どもを育てていけると感じている。

(2) 幼保小の架け橋プログラムの推進に関して

具体的な取組

- ・交流を促進するため、事前と事後に研修を行い、子どもの成長や課題について考察する。
- ・幼稚園、保育園、小学校の教員が互いの保育や授業を見学し、子どもの発達や心の動きについて理解を深める。これにより、教育の連携を強化し、子どもの学びをつなげるために、教師の援助や環境の整え方について考える。
- ・子どもたちの姿を観察し、その結果を基にカリキュラムを見直し、改善する。

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・交流活動などで子どもたちの様子を観察と感想の考察。(活動内容を見直すための研修を実施。)
- ・子どもの成長や教師のサポートについての具体的な事例を共有。(公開保育や公開授業、事後研修を実施。)
- ・アンケートの関連項目についての回答。

中間評価

各種指標結果

- ・公開保育・授業および幼保小交流の取り組み
幼稚園での公開保育(1回)、小学校での公開授業(2回)、保育所での公開保育(3日間の自由参観)、さらに幼稚園・保育所・小学校による交流を2回実施した。それぞれの研究協議では、幼稚園教員・小学校教員・保育士が同じグループで話し合い、子どもの姿の捉え方や援助の方法について意見を交わした。
- ・架け橋期カリキュラムの見直し
幼児期の教育に携わる幼稚園・保育所の教員を中心とした研修を初めて実施し、子どもの姿を丁寧に見取る視点を共有することができた。
- ・保護者アンケート結果(幼保小・地域との連携について)
アンケート項目「幼稚園は保育所・小学校や地域と連携して、子どもを育もうとすること」に対する保護者の回答は、「あてはまる」が91%、「ややあてはまる」が9%という結果であった。

分析(成果と課題)

- ・幼稚園公開保育
昨年に引き続き、幼稚園の5歳児公開保育には小学校教員全員が参加し、保育を1時間じっくりと参観する機会となった。研究協議では、グループに分かれて「個の見取り」「環境構成」「教師の援助」について意見交換ができ、小学校教員にとって幼児教育への理解を深める貴重な時間となった。
- ・幼保小交流の取り組みと課題
1学期には砂場遊びや水遊び、2学期には運動遊びや秋みつけなど、年間を通して「つながり」や「主体性」を意識した交流を計画した。年度当初には教員間で交流のねらいを共有し、5歳児と1年生のペア活動を取り入れることで、子ども同士の関係が深まるよう工夫した。一方で、事前・事後の打ち合わせの日程調整や、参加できない教員へのねらいの共有など、運営面での課題も見られた。
- ・幼保合同研修の成果と課題
これまで実現が難しかった幼稚園・保育所合同の研修を初めて実施できたことは大きな成果である。保育所の勤務体制の関係で参加が難しい教員もいたが、今後はより多くの教員が参加できるよう、負担が少なく継続可能な研修の在り方や、教員の学びにつながる内容について検討していきたい。
- ・アンケート結果の考察
アンケート項目「幼稚園は保育所・小学校や地域と連携して、子どもを育もうとすること」に対して、保護者の回答は「あてはまる」が91%、「ややあてはまる」が9%という結果であり、園の連携や教員の研修への取り組みについて、さらに周知を図る必要がある。

自己評価

分析を踏まえた取組の改善

- ・幼保小交流における教員の連携と意識の共有
事前・事後の研修を通して、子ども同士のつながりや個々の学びや育ちをみんなで共感できる関わりを意識しながら、教員同士が活動のねらいを共有し、援助の在り方について考える機会を持つことができた。今後は、より日常的な場面での連携、協働的な取り組みを模索する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児期の育ちをカリキュラムに反映 幼稚園での公開保育や研修を通して得た幼児期の育ちに関する学びを、今後のカリキュラムに反映させていくことが必要と考える。これまでの慣例的な取り組みも見直す必要がある。 ・ 保護者・地域への発信と理解の促進 幼保小交流の様子や子どもの育ち、教員間の研修の取り組みについて、ホームページや園内掲示、終業式などを通して保護者や地域に向けて発信し、「架け橋期」の充実や幼児教育の質の向上に対する理解を深めていく。
	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 公開保育や幼保小交流を通じた研修 ・ 架け橋期カリキュラムの見直しに向けた研修 ・ アンケート「幼稚園は保育所・小学校や地域と連携して、子どもを育もうとすること」結果（幼保小・地域との連携について）
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>地域の保育所や小学校との子ども同士の交流だけでなく、先生同士が連携し、情報を共有しながら取り組んでいることは非常に意義深いと感じている。地域の子どものための健やかな育ちのためには、教育・保育に関わる者同士がつながりを持ち、共通理解のもとで支援していくことが大切である。</p>

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 公開保育や幼保小交流を通じた研修 小学校教職員を対象に公開保育を実施したほか、1年生の生活科の授業への5歳児参加、ペア活動も継続して行った。公開授業では、事後研修会で幼小の立場から意見を出し合い、話し合うことができた。授業参加については、1年生担任との事前打ち合わせを密にして、活動のねらいを共有した。その他、1年生との交流給食、2年生の生活科授業への参加、保育所の5歳児と共に1年生との交流活動を実施することができた。 ・ アンケート 「幼稚園は保育所・小学校や地域と連携して、子どもを育もうとすること」結果（幼保小・地域との連携について）あてはまる97%、ややあてはまる3%
自己評価	<p>分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <p>本年度は、幼保小連携の充実を目指し、これまでの取り組みを発展させることができた。特に、公開保育では、昨年度は架け橋期の5歳児のみの実施であったが、今年度は3歳・4歳・5歳の全クラスで公開し、小学校の教職員に幼児教育・保育の全体像を見てもらう機会をつくった。これにより、幼児期における発達の特性や学びのプロセスについて、小学校側の理解が一層深まり、幼小接続への共通認識を広げる重要な機会となった。また、小学校1年生と5歳児とのペア活動では、今年度は文字通りの1対1のペアを組み、生活科の学習を一緒に行ったり、交流給食や活動を共に楽しんだりすることができた。1対1の関係ゆえの安心感と親密さが生まれ、5歳児は自信をもって活動に参加し、1年生は「教えてあげたい」「支えてあげたい」という気持ちが育ち、双方の学びにつながる姿が見られた。さらに、2年生の生活科授業への参加、保育所の5歳児と合同で1年生との交流活動を行うなど、園内外の幅広いつながりをつくることができた。これらの活動を通して、子どもたちは異年齢・異集団の中で安心して関わりを広げる力を育み、小学校への見通しをもつ経験が積み重ねられた。</p> <p>保護者アンケートでは、「幼稚園は保育所・小学校や地域と連携して子どもを育もうとしている」という項目に対し、「あてはまる」97%、「ややあてはまる」3%という非常に高い評価を得た。取り組みが保護者にも伝わり、連携への信頼につながっていることが大きな成果といえる。</p> <p>課題としては、公開保育や授業参加では事前打ち合わせを重ねたが、活動のねらいを幼小双方でより具体的に共有すること、実施後の振り返りをすることに十分な時間が確保できないことがあげられる。連携をさらに深めるための協議体制づくりが課題となった。</p>
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>幼小連携の質を高めるために、公開保育や授業参加において、幼稚園と小学校双方が活動のねらいをより具体的に共有できるよう、事前の打ち合わせ内容を明確化し、共有する仕組みづくりを検討したい。また、事後のふり返りはTeamsに投稿して共有したり、Formsでアンケートを</p>

	<p>取り集約したりするなどして、時間をかけずに効率化できないか検討したい。さらに、今年度新たに実施した3歳・4歳・5歳クラス全体での公開保育については、年齢ごとの育ちや学びの特徴、小学校側に見てもらいたいポイントを「見どころリスト」として事前に提示したりするなど、幼児教育への理解をより深めてもらう工夫を行いたい。</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども同士の関わりを支えるためには、日頃から教員間で情報交換や意見共有を行うことが大切だと思う。そのうえで、子どもの育ちをいろいろな面から理解することが重要。 ・これからも、地域の子どもたちが安心して成長していけるよう、園や学校の枠を越えて連携を深めて、必要な情報を共有していくことを期待している。

(3) 預かり保育に関して

	<p>具体的な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異なる年齢の子どもたちが自然に関わり合い、互いに成長し合う機会を大切にする。そのために、教師は子どもたちが自主的に交流できるように援助する。 ・就労や育児のニーズに応じて、年少組の預かり保育が増えていることを踏まえ、年齢に適した遊具や環境を整える。預かり保育担当者と協力して、子どもたちが安心して楽しく過ごせるように工夫する。
	<p>(取組結果を検証する) 各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・預かり保育の参加人数。(周知活動を検討。) ・子どもたちの反応。(活動内容を検討。) ・保護者アンケートの関連項目についての回答を集計分析。(結果を今後に反映。)

中間評価

	<p>各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早朝預かり保育は、5歳児と4歳児が2名ずつの固定メンバーで、曜日によって変わるが、2人～4人の利用である。通常預かりは、5歳児が7～8人、4歳児が2～3人、3歳児が3～4人、平均13～14名の利用で、ほぼ就労事情での利用である。 ・遊びの見取りから、遊具や環境の整備を行っている。 ・保護者アンケート項目「園は、安心・安全な預かり保育の運営を行っていること」の回答は、「あてはまる」82%、「ややあてはまる」18%であった。
自己評価	<p>分析 (成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早朝預かり保育は、静かな朝のゆったりとした時間を穏やかに過ごせるように、落ち着いて遊べる遊具などを準備したり、教師との会話を大事にしたりしている。子どもたちも朝の雰囲気を楽しみながら過ごしている。通常預かり保育では、続きができるように作品を残しておくことで、楽しみに参加する姿が見られている。 ・保護者の間違いで利用の登録が出来ていなかった子どもが、急遽、預かり保育になるような場合など、嫌がる子どもの対応に苦慮する場面が少なからずある。また、個別に支援が必要な子どもが参加する時の安全確保も大きな課題である。 ・アンケートでは、「ややあてはまる」が16%と、やや高い値である。これは、上記の支援が必要な子どもへの対応に対する不安ではないかと考えられる。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの姿から、子どもが興味をもったり、楽しんだりできる遊具の種類や活動を増やす。また、保護者が安心して子どもを参加させることができるように、特に支援の必要な子どもに対して、通常保育でも取組を進め、預かり保育へ繋ぐようにする。 ・預かり保育利用について、広く周知を図る。
	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・預かり保育の参加人数 ・保護者アンケート項目「園は、安心・安全な預かり保育の運営を行っていること」の回答

学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「預かり保育」の認知度を上げる取り組みが必要。
---------	---

最終評価

<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・預かり保育の参加人数は、常時おおむね15～20名程度の利用がある。多くの子どもは16時に降園し、17時すぎまで利用する子どもは3～4名程度である。年齢別に見ると、5歳児はほとんどの子どもが日常的に利用しており、4歳児についても半数以上が利用している。一方、3歳児の常時利用は少ないものの、通院や保護者のリフレッシュなどの理由で利用される機会が増えてきており、家庭のニーズに応じた活用が進んでいる。 ・早朝預かり保育の利用人数は、常時2～3名程度である。時期によって遊びの様子に違いが見られたり、日によって子どもの気持ちや体調が不安定であったりするため、固定した活動にこだわらず、その日の子どもの様子を丁寧に把握しながら遊びや関わりを考えている。落ち着いて一日を始められるよう、環境や活動内容を柔軟に工夫している。
--

自己評価	<p>分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4、5歳児の利用が多いため、手先を使った知育玩具（ラキューやレゴブロックなど）の遊びが人気である。次の日に続きができるように作品を残しておくことを希望する子もいて、継続して遊びたい思いが続いている。 ・カードゲームや将棋など、預かり保育担当教員と共に楽しみながら、友達との関わりが増えていっている。ルールを理解した5歳児が、年下の子どもに教える姿も見られ、異年齢での関わりも深まっている。 ・早朝預かり保育は、日によって子どもの状態が不安定であることが多々あるが、(特に3歳児)担当教員が、安定できるように寄り添ったり、興味をもてる遊びを提供したりして関わっており、保護者も安心して送り出している。担当教員が固定化されることで、「担任」のような関係性がつくられている。 ・保護者アンケートより、概ね満足していただいている。(あてはまる87%、ややあてはまる13%) 今後も安心して預けられるように、活動内容を検討していきたい。
------	---

<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通常の預かり保育においては、3歳児の利用も徐々に増えてきている。早朝預かり保育においても、子ども一人ひとりの生活リズムや気持ちの状態には個人差が見られるため、参加人数や学年構成、時期などを踏まえながら、その日その集団に合ったおもちゃや遊びを選択していく必要がある。 ・一人で落ち着いてじっくりと遊べる場と、友だちや異年齢の子どもと関わりながら遊べる場の両方を大切に、それぞれの子どものが安心して過ごせる居心地のよい環境となるよう、今後も空間構成や遊びの内容を工夫していきたい。

学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・働く保護者にとって、預かり保育の充実は大きな支えとなっている。 ・長時間利用できる仕組みが整っていることなど、預かり保育の実施時間や内容について、今後も積極的に発信し、周知してほしい。
---------	---

(4) 子育ての支援に関して

<p>具体的な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ほっこり子育てひろば」(ひだまりサロン)では、保護者同士が子育ての困りごとや喜びを共有し、安心して楽しめる時間を提供する ・満3歳児を対象とした「いちご組」を開設し、地域の未就園児に対する子育て支援を強化する。 ・児童館や保育所と連携し、保護者や子どもの実態について情報を交換する「ぐんぐん会議」を定期的に開催する。 ・地域の事業に参画し、子どもたちの成長を支えるための環境を整える。
--

	<p>(取組結果を検証する) 各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほっこり子育てひろばの実施回数と参加者数。 ・「ぐんぐん会議」の実施回数とその内容。 ・保護者アンケートの関連項目についての回答を集計分析。
--	--

中間評価

	<p>各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ほっこり子育てひろば」(ひだまりサロン) 5回実施(参加者16名)。家庭教育学級は日程調整中(3学期)。 ・「ぐんぐん会議」3回実施。各施設の現況の報告と情報交換。 ・保護者のアンケート項目「園は、保護者の子育て支援の充実を図っていること」の回答は、「あてはまる」が94%「ややあてはまる」が6%であった。
--	--

自己評価	<p>分析(成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ほっこり子育てひろば」(ひだまりサロン)は、毎月の誕生会後に開催しており、日常的な話題を中心に楽しい時間になるように心がけている。少人数で話しやすい雰囲気、子育ての悩みだけではなく、家庭の在り方などについても前向きに話すことができた。ただ、就労のために参加できない保護者も一定数いるため、別の機会を設けることも検討する必要がある。 ・「ぐんぐん会議」では、11月のイベントの打ち合わせや情報共有を行った。各施設の現況、子どもや保護者の様子を共有することで、地域を俯瞰した視点を持つことができた。 ・預かり保育、業者弁当、未就園児クラスについては、概ね好評である。 ・未就園児クラスの活動が充実し、口コミでの広がりを見せている。新たな利用が増え、地域の子育て支援につながっていると感じる。
------	--

	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ぐんぐん会議」では、今後も児童館・保育所との連携を継続し、地域の実態把握に努めたい。 ・未就園児クラスについては、口コミだけではなく、さらに広報が必要。
--	--

	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほっこり子育てひろばの実施回数と参加者数。 ・教育相談(未就園児クラス)の取組や参加人数。 ・アンケート「園は、保護者の子育て支援の充実を図っていること」の回答。
--	--

学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・未就園児クラスについて知らない保護者もいる。周知活動、広報の充実が必要。
---------	--

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ほっこり子育てひろば」(ひだまりサロン)は通年で9回実施(参加者26名)。 ・教育相談(未就園児クラス)は年間132回実施。およそ平均6~10名の参加人数。 ・保護者のアンケート項目「園は、保護者の子育て支援の充実を図っていること」の回答は、「あてはまる」が97%「ややあてはまる」が3%であった。
--	---

自己評価	<p>分析(成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ほっこり子育てひろば」に参加した保護者のアンケートからは、保護者同士が同じような悩みを共有し、共感し合える場として高い満足度が得られていることが分かった。一方で、働いている保護者が増えてきている現状もあり、時間や曜日が合わず、参加者数が伸び悩んでいる点が課題として挙げられる。 ・未就園親子クラスでは、製作活動をはじめとした様々な取組が好評で、親子で楽しく参加する姿が多く見られ、満足度の高い活動となった。幼稚園という環境だからこそできる経験を提供できている点は成果であるが、事実上の増設学級であるため、担当教員などの負担にも配慮し、内容の工夫を継続していく必要がある。 ・満3歳児いちご組については、継続的に参加する子どもが多く、その後の入園にもつなが
------	--

	<p>ている点は大きな成果である。一方で、いちご組が週2回実施されている影響から、金曜日に行っている2歳児のみの親子クラスの利用が減少している傾向が見られる。利用状況に偏りが出ていることが課題として挙げられる。</p>
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ほっこり子育てひろば」については、参加しやすい工夫（日時設定、回数等）を具体的に検討する。 ・教育相談、未就園親子クラスについては、親子一緒に活動から子どもだけの活動へと、保護者・子ども双方が安心してスムーズに移行できるような支援を継続して、幼稚園に「来たい」「参加したい」と思えるよう工夫を重ねていきたい。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域には子育て支援の取組として、子育て活動や保育所や児童館での子育てクラブなど、さまざまな場が用意されているので、小さなお子さんを育てる保護者が、こうした地域の資源に状況に応じて活用しながら、子育ての悩みや喜びを共有できる仲間と出会っていけることは、とても大切であり、望ましいことであると感じる。

(5) 地域とのかかわり（社会に開かれた教育課程）に関して

	<p>具体的な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会で幼稚園の教育方針について発信し、幼稚園教育の理解を深める。 ・幼稚園評価で、保護者や関係者から意見を聞き、評価委員会で教育計画の改善を図る。
	<p>(取組結果を検証する) 各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会での園行事や地域交流についての意見聴取。 ・評価委員会での検証。 ・保護者アンケートの関連項目についての回答を集計分析。

中間評価

	<p>各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月26日学校運営協議会で、教育目標や園の実態について発信した。 ・評価委員会を行い、保護者評価と教職員評価の結果をみて、違いや今後の課題などを出し合った。 ・アンケート「幼稚園は保育所・小学校や地域と連携して、子どもを育もうとすること」に対して、保護者の回答は「あてはまる」が91%、「ややあてはまる」が9%という結果。
自己評価	<p>分析（成果と課題）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域への教育方針の発信と子どもの成長の共有 園の運動会などの行事を通して、地域の方々に子どもたちの成長した姿を見ていただく機会となった。 ・評価委員会での振り返りと課題の共有 保護者評価をもとに学級経営を振り返る中で、以下のような課題が挙げられた。 <ul style="list-style-type: none"> - 3歳児：先生との信頼関係を築きながら、基本的な生活習慣を身につけるための丁寧な関わりの継続 - 4歳児：友達や集団で遊ぶ楽しさを十分に感じられるようにすること - 5歳児：さまざまな人と関わりながら、友達と遊びを発展させていけるようにすること ・保育所や小学校との連携とPTA活動の工夫 保育所や小学校との交流については、保護者から高評価の声が届いている。また、PTA活動についても可能な限り負担を軽減していく方針で運営されており、保護者から共感を得ている。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域、保護者への情報発信の充実 ホームページやインスタグラムの定期的な更新を通して、幼稚園教育の取り組みや子どもたちの様子を地域や保護者に向けて発信しているが、今後も継続的な情報発信により、園の教育方針や活動への理解を深めていく。 ・評価委員会での意見を踏まえた教育の方向性 評価委員会では、保護者の願いや担任の思いを受け止めながら、子どもが豊かな経験を通して成長できるよう、園の教育方針に基づいた取り組みを進めていく。今後も、子ども一人ひとり

	の育ちを大切にしながら、教育の質の向上を目指していく。
	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園行事や地域との交流について、学校運営協議会での意見聴取 ・ホームページの定期的な更新 ・幼稚園評価結果についての評価委員会の実施
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>自分たちの関わりが子どもたちにとって良い体験になっていることを嬉しく感じている。今年の活動も楽しみにしている。今後、機会があれば保護者も一緒に参加できるような、より豊かな活動ができるとよいと感じている。</p>

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・女性会の方にお世話になり、年長児を対象に茶道体験を開いていただいた。子どもたちは日頃触れる機会の少ない茶道に親しみ、地域の方々とのつながりを感じる貴重な体験となった。 ・ホームページの更新については、定期的に行っている。インスタグラムは未就園の教育相談クラスの情報を発信している。
自己評価	<p>分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域事業である「ぐんぐんひろば」には4・5歳児が参加し、近隣の保育所の子どもたちと一緒に楽しい時間を過ごすことができた。また、「ぐんぐん会議」では、児童館や保育所と情報交換を行い、地域の幼児教育に関する連携を深める機会となった。 ・女性会の方々にお世話になった茶道体験では、日常ではなかなか触れることのできないお茶室で、作法を教えていただいたり実際にお茶を点てたりする貴重な経験ができた。ただ作法を学ぶだけでなく、「おもてなしの心」や茶道に込められた願いについても教えていただき、伝統文化の奥深さに触れることができた。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・茶道体験や地域の行事の経験を保育につなげたり、子どもの姿を発信したりして、地域とのつながりについて考えていく。 ・小学校との共催である評価委員会について、適切な組織運営を模索する。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お茶会では、子どもたちのかわいらしい姿が見られ、また抹茶を初めていただく子どももいて、貴重な体験となっているように感じられる。日本の伝統文化に触れる機会として、取り組んで良かった。 ・行事を通して、地域とのつながりを大切にしながら、子どもたちの豊かな経験につながる活動を継続して行ってほしい。

(6) 教職員の働き方改革について

重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・業務の効率化と改善を行う。 ・行事内容の見直しや精選を行う。 ・働きがいと働き方についての意識改革を促す。
具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTを活用した効率化。(教材教具の製作や連絡や配布文書作成、事務処理などで活用。) ・時間外勤務の削減(定時と休憩時間一覧の提示。) ・各担当業務の明確化。(校務支援員の有効活用など。)
(取組結果を検証する) 各種指標	<ul style="list-style-type: none"> ・時間外勤務の時数。 ・保護者アンケートの関連項目についての回答を集計分析。

中間評価

各種指標結果 ・時間外勤務の状況 管理職以外は 45 時間内である。	
自己評価	分析（成果と課題） 校務支援員や特別支援加配などの職員が十分に機能しており、担任を支援するだけでなく、園全体の運営を円滑にしている。結果として、保育の質を落とすことなく時間外勤務時間の増加を抑制しているように思われる。ただし、担任の定時退勤は未だ難しい。また、管理職については、預かり保育の管理業務がある以上、定時の出退勤は現実的に難しく、時間外勤務時間も減少しない。
	分析を踏まえた取組の改善 ・業務の効率化をさらに推進すること（AI やデジタルツールの活用）。 ・業務内容についての自己点検（過剰ではないか・自己満足に陥っていないか）。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 ・定時退勤の回数 ・時間外勤務の累計
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・働き方の取り組みが進み、その結果、「幼稚園の良さがなくなった」みたいなことにならないようにしてほしい。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果 正規以外の職員は、ほぼ定時退勤での勤務が実現しているが、担任および管理職は常態的に前後の時間外勤務が続いている。時間外勤務の時間数は、ほぼ月 4 5 時間未満で推移している。	
自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題 ・業務の効率化と改善については、進んでいる部分と旧態依然のままの部分がある。 ・行事内容の見直しや精選も進んでおり、ほぼ削る部分はない状態である。 ・働きがいと働き方についての意識改革は、園だけでは困難であると感じている。
	分析を踏まえた取組の改善 ・思い入れやこれまでに成功体験があるようなことに対しては、効率化や合理化を拒んでしまう傾向があり、改善には時間がかかると思われる。地道に進めるものとトップダウンによる変更を行うものを仕分けていきたい。 ・市立幼稚園および学校全体を包括した取組、行政の施策を期待したい。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・園でも業務の見直しや環境改善など、さまざまな工夫が進められていると思うが、こうした取組の意義や成果については、保護者や地域にも分かりやすく伝えていくことが大切だと思う。